



#1279  
77

原始文様集

第二輯

大正  
13. 2. 15  
内交

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始





## 原始文様集解説

### 第二輯

#### (11) 急須形土器

口部に缺失あり、所謂磨り消し文を用ひたり。腹部に凸帯を繞し、之に斜行せる押文をつく。凸帯上部は、上下に沈線を引き、上より相背ける巖手文を描き、それに弧線を架し、その中を磨り消し、その各要素の間に半圓を上下におき、之を繰返せり。地は縄文。底は淺き鉢底を作り、足を中心とし、底表面を四區に分ち、此に相對して各同一要素の曲線文をおけり。地の縄文は細かく、文様瀟細、比較的薄手なると相まつて、繊細の美を感じしむ。

#### (12) 土瓶形土器

下總國東葛飾郡川間村東金野井發見、黒みがちにして薄手、釣手の部分を缺失せり。此を第一集所載の土瓶形土器の優美なるに比すれば、聊か鈍重の感なきに非ざるも、文様はよくその形態に協ひ、そこに一種の快感を感じしむ。主文様は腹部に繞せる帯文なるべし。帯文は上下に各沈彫

(7) 第一輯 解説

線四筋を繞し、之に鋸齒文の尖端を下に向けて描き、これを各四線となし、その尖端より上に向け、帯線に三線づつを描き、それと前記鋸齒文様の左右に、篋の刃先を上に向けて蹴り彫りに點線をつけたり。鋸齒文の線が直線とならずして凸曲線となりしは、寧ろかくの如き凸面體の裝飾として有効なるべし。帯文の上に、更に六本の並行線を沈彫にせり。底に磨文あり。高さ三寸五分五厘、底徑三寸一分五厘。

#### (13) 皿形土器

實物の寫眞は、第一集7にのせたり。文様は、磨り消し文と稍、手法を異にし、縄文地を等分に區劃し、その界線に三線と二線の直線を沈彫にし、その間の區内には、簡單に劍菱文に似たるものの身部を、大膽に長く引いて、些の踏踏なく先きに近づいて曲けしに、力の充實を感じしめらる。而して多少、長く引きし身部の片側に生ぜし空間を、短く菱文を補ふて填充し、聊かの隙をも與へざりし技術を賞すべし。なほかかる手法は、かの飛鳥文様に於いて盛んに行はれしもの、これに似たる手法の古く石器時代土器に存せしは、興味深し。



(14) 香爐形土器

後世の香爐の或る者に形似たるものあるを以て、香爐形土器の名を以て呼ばる。類品極めて稀なり。木間版のものは、上部に缺失あるも、其の残存部に注意すべき圓様施されたるを以て、學界の注意をよめ来りしもの、即ち上部に顔面を現せり。これ第一集<sup>1</sup>に示せしが如く、原始人が好んで用ひし裝飾の一にして、一種の拜物思想<sup>2</sup>に因きしもの、縄文土器の顔面把手と稱せらるゝもの同一意匠なるべきか。而して本遺品の顔面が、土偶の或る物とも似たるものあり、土偶については、後巻に之を述べべきも、同じく一の原始宗教的遺物なるに見て、更に本遺品の顔面の意義を解すべきか。

土器の腹部の上面は、透彫にせり。是れ香爐形土器に普通見る手法にして、その透しを周らせるの香爐に似たるところなるべし。而してその透しを作るには、方形を横に並べたる帯文をつくり、その中に菱形を入れ、その菱形の中央を透線に沿ふが如くにせり。是れを繰返しつゝ、而してなほ、其の中間に三角形を填充してその中を亦三角形に透しにせり。かくして、裝飾は器の上半分に努められ、下半分は不規則なる曲線文を繞らし、脚は縄文をそのまゝ、殘せ

り。かくしてもし完存せば、香爐形土器の優の尤たるものとなりしならむ。

(15) 變形土器？ 殘片

下總國東葛飾郡分村堀内貝塚發見、大形の變形土器の殘片なるも、文様にすぐれしものありしを以て採れり。堀内貝塚發見の土器には、文様に見るべきもの多く、種々の形式の石せらるゝを推知し得、本土器片の如き、その一なり。即ち口縁部は大體に於いて平滑、僅かに一の耳が小さく突出せるのみ。縁に沿ふて太き沈彫の線を繞し、耳のありとところのみ、小さき山形の線を添へたり。而してその耳を以て一の中心とし、之に軟く線をひいて、相稱に近く一の曲線文を描けり。描けるところ、一の植物文の硬化せるが如きに似たるも、恐らく、これ無意識に引ける曲線文の自から作りしものならん。その施文に當つては、細き沈線を以てせるを以て、全面に繊細にすぎたる趣を有せしむるも、上縁の線の下に更に一筋、太き沈線を無遠慮に引き、殊に耳の下に於いて、大様に過文を描きしを以て、變形の如き大形の土器としてやや過ぎたる繊細を多少引き戻せる感なきに非ず。かくしてかの磨り消し文の有する繊細が多量合理的の趣を有するに比し、此は多少情緒的のものなき

にあらず。

(16) 土器 殘片

九州南部の文様一端を見るべく、肥後國宇土郡轟村宮莊貝塚發見の土器殘片を採れり。九州に於いては、縄文土器の發見せらるゝことは、之を關東以北に比すれば遙に少きが如く、殊に北九州に入つては、殆んど之を見るべからず。轟の貝塚の如きは、九州に於ける縄文土器發見地としては、北端に近き位置にありといふべし。

轟貝塚の土器はその文様に於いて或は古拙なる性質を發揮し、或は脚が新しきものあるも、兩者は發見せらるゝ地點に何等層位的區別なし。而して全體より見て、土器の製作文様の古拙原始的なりといふを得可し。之れ時代の新古によるか、土地の僻遠より來れる文化の地方的劣等によれるか、その孰れかあるべく、今日に於いては作出物に見て、先づ時代の古きが爲めなるべしと推定し得べきものありといふ。

1は沈彫の直線を以て、復線鋸齒文に似たる一種の組帯文をつくれり。2は濱田博士の隆起細帯文と命名せられしもの、器の表面に後より粘土帯を附着し、指頭を以て之を伸ばしたるものなるを以て、不整形なるもの多く、一見

(9) 第一輯 解説

「<sup>3</sup>、<sup>4</sup>、<sup>5</sup>、<sup>6</sup>、<sup>7</sup>」に似たる觀を呈せり。この種の文様は、發見せられたる數多く、轟土器の一特徴をなせり。而して此の種文様を附したる土器は、表面粗粒にして稍、黒色を帯び、比較的薄手なるを常とすといふ。<sup>6</sup>も亦同一手法にならぬもの、<sup>5</sup>は太形凹文ともいふべく、指頭或は其他を以て太き沈線を描き、直線曲線の各種文様を作る。この手法は、同じく肥後の阿高貝塚の土器の特徴とするところにして、阿高式文様ともいふべし。(京都帝國大學文學部考古學研究報告第五冊參照)

(17) 變形土器

陸奥國三戸郡倉石村大字中市發見、高一尺二寸の大形の變形土器なり。外形に於いて注意すべきものあり、即ち腹と頸に各二凸帯を繞し、その間を裝飾の主要部とせり。先づ四區に分ち、その界線として二凸帯を並べ、中央に結節をつけたり。凸帯全部の手法は、一面、繩をかけて吊す爲めのものなるべきも、一面、その繩をかけて吊したるに模倣せる意匠ならんか。内區の文様は、沈文を以て、大様に弧線を用ひて上下均齊に近く作れり。縄文地はなし。

(18) 皿形土器



陸前國牡鹿郡石巻附近の發見にかかる。口圖版のと同じく奥羽地方に多く見る型式にして、所謂磨り消し文様の類なり。即ち縁は此の種土器に見る如く、腕手の兩端を現せるに似て、二個を以て一單位とせる小凸起を繞らして、裝飾とせり。この手法は、前述せるが如く、その要素に腕手を用ひしものあり、葉枝を組み合せたるものを現せるものもありて、精巧驚くべきもの往々あり。本遺品は比較的簡單なる手法に屬す。皿の外題にある文様は、全區を五等分し、各々に相同じき一種の曲線文を配せり。文様は弧を主として組み合せたるもの、各單位殆んどその形相似たるものもあるも、しかも小異ありて全く同じものとはなすべからず、恐らく型を用ひしものには非ざるべし。皿の外側の如き面を五等分するは、容易なるものに非ざるべく、しかも之に型を用ひずして、相似たる文様を均齊を保ちつ、描きし技は凡なりとはなすべからず。底に低き縁底をつけたり、奥羽地方の土器には縁底を有するもの少からず、西日本の土器には極めて稀なる手法にして、陶器もその古墳時代の末期に入つて始めて之を見るが如し。東日本發見土器の考察に看過すべからざる事實なるべし。

(19) 脚付壺形土器

15圖版と同じく、下總國東葛飾郡國分村堀之内貝塚發見のもの、類品極めて稀なる型式といふべく、壺形といふも、腹部内曲線をなして丸からず、腹部に一孔あるは、古墳發見の陶器の中にある縁と似たるものあり、頸部著るしく長く、脚と全く同形なり。厚手にして色黒をなす。文様は手法粗雑にして、腹部の上下に二線を引き、その中には小さく、下は大きく、弧形を相背いて描き、それと前述の上下二線との間に、不規則に斜行せる櫛齒文を填めたり。圖版左側上部の拓影は、上部の文様、下部の拓影は、腹部下側のものなり。高さ四寸九分、腹徑二寸六分、口徑二寸一分、脚口徑一寸九分。

(20) 皿形土器

厚手にして、耳あり、皿形土器に耳あるは、特異の型式といふべきか。文様は極めて施文に於いて不規則にして、一見藻葉の如きものを甚しく硬化せしが如く作れり。比較的厚手なると相まつて、一種の野趣を感ず。



急須形土器  
(見發掘附古蹟十字大村野郡那經津中國奧陸)

11

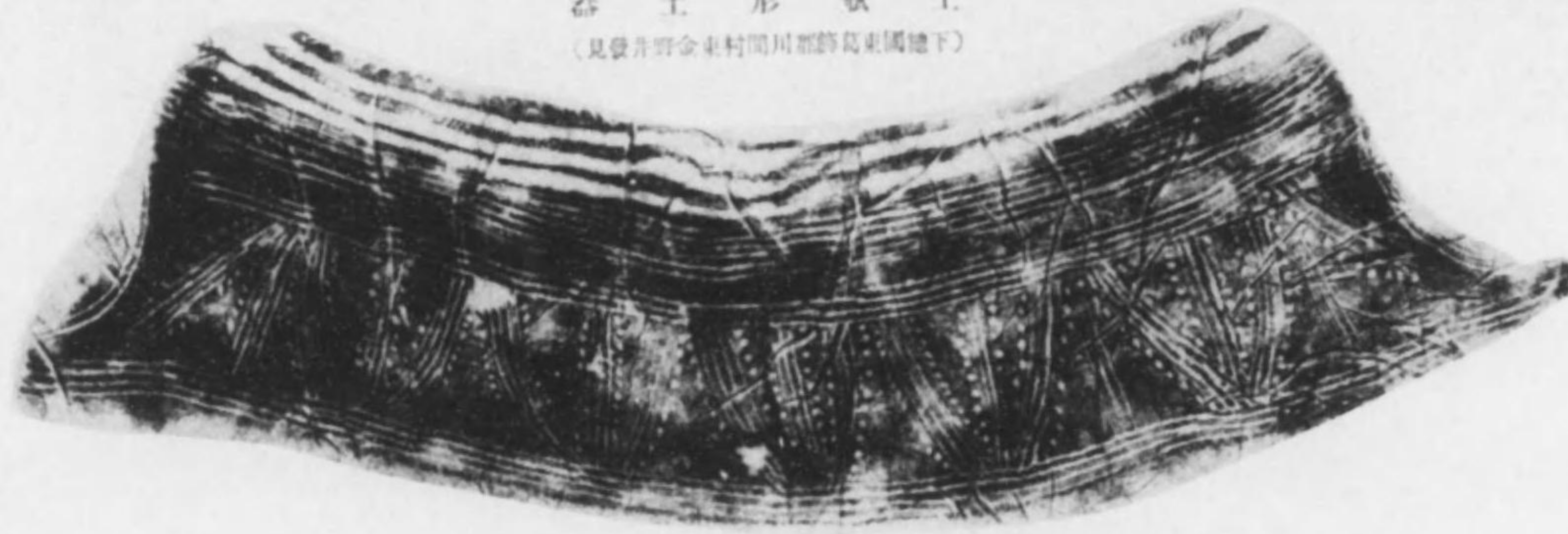


(藏館物博室帝京東)



土 瓶 形 土 器

(見發井野金車村岡川部野葛東國地下)



(見發井野金車村岡川部野葛東國地下)



器 土 形 皿

(見發掘本大宮要村遺跡七郡城宮國前跡)



(藏奉大國帝北東)



香爐形土器  
(見發地谷前郡本橋國前陸)

14



(藏氏門南右善藤齋)



缺殘器土形甕

(見發掘具內之類村分國郡等東區地下)

15

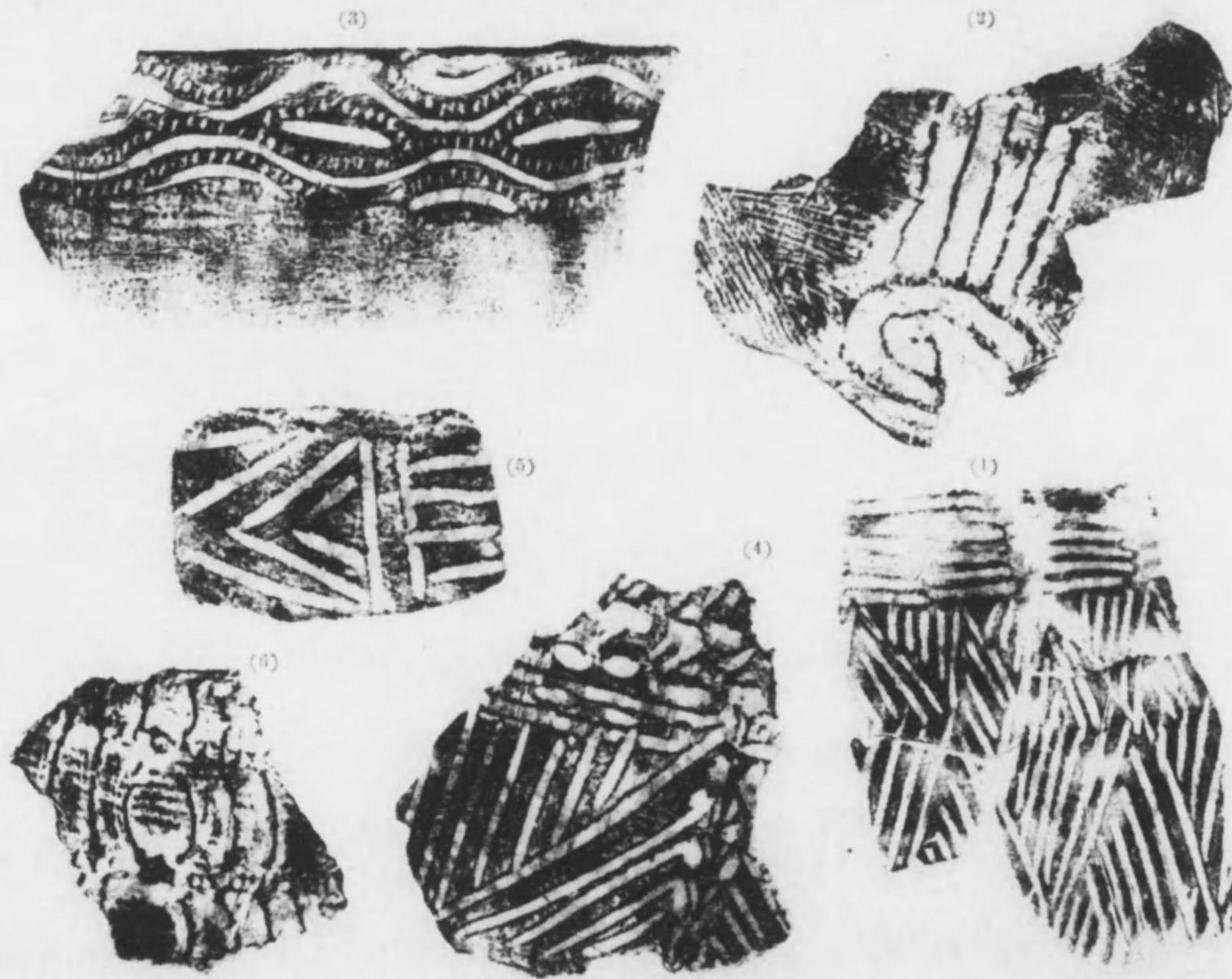


(藏室教學類人部學理學大國帝京東)



片 殘 器 土

(見發掘貝莊宮村轟郡土宇國後聖)



(藏能學文學大國帝那京)



瘦形土器  
(見發市中字大村石倉郡戶三國興陸)

17



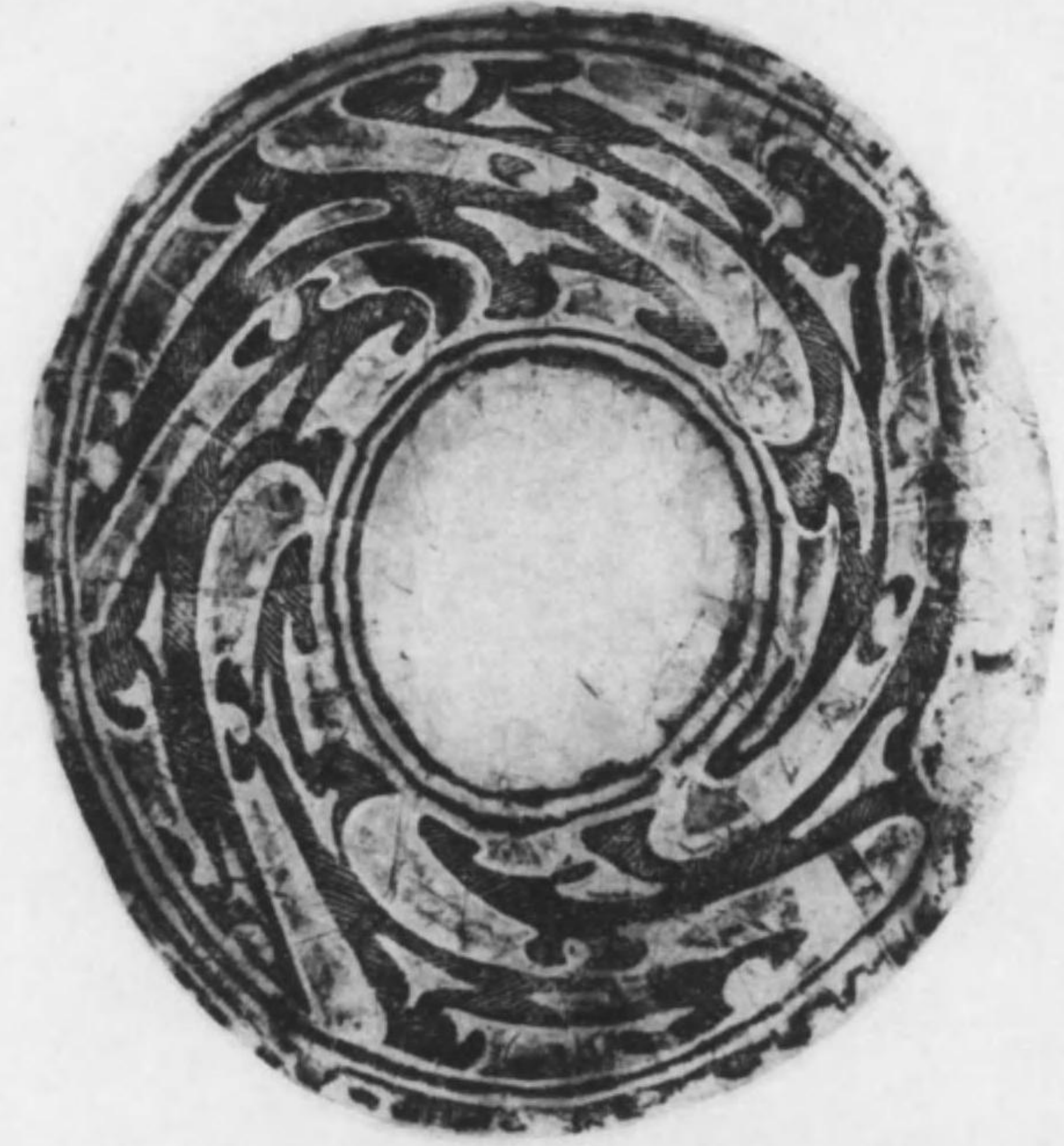
(藏館物博室帝京東)



皿形土器

18

(見發町卷石郡鹿社國前陸)



(藏氏那七總科毛)



器土形壺付脚  
(見發掘具內之堀村分國郡藩島東國總下)



(藏氏垣磐川谷)



器 土 形 皿  
(見登内波十字大村野裾郡津中國奥跡)

20



(藏館物博室帝京東)



終

大正十三年一月廿五日印刷  
大正十三年一月三十日發行

編輯者	杉山壽榮男
發行兼印刷者	工藝美術研究會
右代表者	東京市牛込區矢來町三番地 田村壯次郎
印刷所	東京市本郷區湯島四丁目廿番地 大塚巧藝社

發行所 工藝美術研究會  
振替長野三五二二番

不許複製